

第十七回がん哲学塾

ニュースレター

発行日：平成 31 年 2 月 6 日

神戸薬科大学 薬学臨床教育センター

E-mail:juku_0307@yahoo.co.jp

1月26日(土) 中医師の今中健二先生をお招きして
第22回メディカルカフェを開催しました。
今回は2回～5回生が参加しました。

メディカルカフェに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ

3年生 渡邊 理乃

午前中のがん哲学塾では、樋野興夫先生の著書『いい覚悟で生きる』の中の“お互いが苦痛にならない存在となる”について話し合いました。この一節の中にスタッフの心得として3ヶ条があるのですが、ひとつめに「品性」とありました。本を読んでいるときは言葉の意味について意識しませんでした。品性とは何かを考えたときに答えが思い浮かびませんでした。今実習に行かれている先輩がお話してくださったのは「品性は言葉で表せるものではなく、一緒に過ごすことで素敵な品性をもつ方と感じた」というものでした。また今回の一節の題でもある“お互いが苦痛にならない存在となる”には、無理に話さなくても沈黙の時間も共有できるということも含まれていると感じ、患者さんと長い沈黙の時間も苦痛なく共有できるならば、メディカルカフェのスタッフとしての品性も完成に近づくのではと感じました。他にも自分を認める能力の高低についても話し合いましたが、「これでいい」と第三者に認めてもらうことで救われた体験があるというお話を聞いたときに、患者さんはスタッフや医療者から認めてもらえるとそれだけで助けられ喜びを感じると知り、将来はありのままを認めて少しでも患者さんの不安を取り除けるような医療者になりたいと思いました。

午後は、中国医学の専門家で中医師の今中先生の講演を聞きました。中医学からみたがんの原因と対策についてお話してくださったのですが、私の知らないことがたくさんあり、とても新鮮な気持ちで講演を聞けました。まず、がんには陰と陽があり、陰陽の違いは治療のアプローチにも違いがあることを知りました。がんが発生する仕組みを水を入れた鍋に例えて説明してくださったのですが、とてもわかりやすく、解決法も鍋にかけている火を弱くしたり水を減らしたりとイメージがしやすかったのがとても印象に残っています。また鍋は胃を指し、胃の不調が他の臓器の不調に繋がると知り、胃は体の中で体調のバロメーターであることも知ることができました。他にも、私たちが日頃から簡単に体の様子を知る方法として舌診があるということも知りました。舌は胃の鏡であり、舌が水っぽいかどうか、舌の側面に歯形がついているかどうかで胃の様子がわかるそうです。これなら簡単に胃の調子を知ることができるので、体調管理をする上でのひとつのバロメーターになると思いました。

後半のカフェでは、がん患者さんとグループトークをしたのですが、前々回のカフェに来てくださった方とお話する機会があり、その後あった楽しかったことや旅行をしたことのお話をしてくださりました。何よりも、また会えて嬉しいと言ってくださったときは本当にこのメディカルカフェのスタッフをしていてよかったと心から思いました。

次ページへつづく

カフェに来てくださるがん患者さんは、心がとても強い方が多く、いつも明るく笑顔で私の方が力をもらうばかりです。このメディカルカフェで過ごした時間はとても貴重な体験であり、この場で学んだことを勉強や日常生活に活かしていきたいと思いました。

メディカルカフェの役割について

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

5年生 堀部 里帆

今日の午前中は、樋野先生の本の「お互いが苦痛にならない存在となる」という文章から、それぞれが思う事を話し合いました。

私はカフェの前日まで、病院実習に行っていました。担当の患者さんの所に毎日行っていたのですが、段々と話す事もなくなり、私が患者さんの所に行く意味はあるのか、と疑問に思っあまり行きたくないなあ、という気持ちが芽生えてしまいました。しかし、ある時患者さんが「また明日も顔見せてね」と言ってくださったのです。その時、患者さんは私に何も期待などしておらず、ただ会いに来るだけでいいんだ、と思えてずっと気持ちが楽になり、明日も会いに行きたい、と思うようになりました。

午前中に話したテーマである、「お互いが苦痛にならない存在となる」というのは簡単なようで難しい事のように感じていました。それは、相手が何をしたいのか分からないから。だけど、病院実習中に、思っているほど、人は他人に何かをしてもらう事を期待していないのではないかと、思いました。

メディカルカフェも同じで、メディカルカフェに参加して下さったからには、来てよかったと思っ欲しい、と厚かましくも思っしまい、そのせいで「何を話せばいいんだろう」と少しプレッシャーに感じていました。今日のメディカルカフェに参加して下さった方の中に「自分ががんと言われた時、どうしていいかわからなかった。でも、その時にメディカルカフェの存在を知っ、自分の辛さをシェアすることができて、こんな風に思うのは自分だけじゃないんだと思っ、本当に救われた」とおっしゃる方がいました。この言葉を聞いたとき、私たちがどんなことを話すか、ということではなく、話をできる場がある、そのことだけで少しでも患者さんの役に立てているのかも、しれないと思っ、とても嬉しくなりました。

また、前回参加されたある方は、抗癌剤の影響で免疫力が下がっっており、本当は外出もあまりしたくないけれども、これでは良くないと思っ参加されたとおっしゃっていました。その方は他の参加者の方の元気さに感銘を受け、次回も来ます、と言っ帰っいかれ、本当に今回来っ下さっていました。今の時期はインフルエンザが大流行しているにも関わらず、参加しようと思っ下さったのです。

このように、人と人との出会いで相互作用をもたらしあえる場を作ることこそがメディカルカフェの役割なのではないかと最近感じています。そして「この人にいい影響を与えよう」とか「この人を変えよう」と思っ結果ではなく、それぞれの人がそれぞれの考えをもっそこに座っ話すだけなので、「お互いが苦痛にならない存在となる」という事なのかなと思っます。

これからもメディカルカフェで色々な人の出会いをつなげながら、私自身もいろんな人の考え方にふれていきたいです。

メディカル・カフェに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ

2年生 森山 由理

1月26日に神戸薬科大学サテライトセンターで開催されたメディカル・カフェに参加させていただきました。今回は今中健二先生に「中医学からみたガンの原因と対策」というテーマでお話をいただきました。私は中医学という言葉を知ったことはあるものの、中医学がどのようなものか全く知りませんでした。“陰”と“陽”という考え方や経絡という言葉など初めて聞くものばかりで最初は戸惑いましたが、自分の知らない世界に触れることができ、大変勉強になりました。お話を聞いて、先生が最後におっしゃっていた「自分の中で腑に落ちたことを信じる」という言葉のように、自分で治療法を選択する際、選択肢がたくさんあると、より自分に合った治療法を見つけることができると思いますし、納得して治療を受けることができるのではないかなと思いました。選択肢を増やすためにも一つにとらわれず、幅広い知識を身につけることの大切さに気づかされました。

講演の後にはカフェが行われました。これまで何度かカフェに参加させていただきましたが、同じ班の半分以上の方が医療従事者だったのは今回が初めてでした。もともと中医学の勉強をしていて今回勉強の一環として参加してくださった方や、ご友人にこのカフェの話を聞いて興味を持ち参加してくださった方など、様々な理由で今回参加していただきました。仕事の合間に自分の興味のある分野を勉強したり、気になるイベントに積極的に参加したりされている姿を見て、私も将来こういう風に常にアンテナを張り、日々自分を高めていけるような人になりたいと思いました。

また、今回のカフェでは11月のカフェで同じ班だった方と偶然同じ班になりました。話しかけてみると私のことを覚えてくださっていてとても嬉しい気持ちになりました。一番最初にメディカル・カフェに参加した時は「何を話したらいいんだろう」という不安でいっぱいでしたが、カフェに何回か参加するうちにお会いしたことのある方がどんどん増えて、いつのまにか「明日は〇〇さん来てくださるのかな～」とカフェに参加するのがだんだん楽しみになっていました。

この1年でたくさんの方に出会い、学校の座学では学べない多くのことを経験できたことに感謝の気持ちでいっぱいです。アクティブ・ラボとしての活動は3月で終わりですが、これからもカフェに参加できたらいいと思います。

メディカルカフェに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ

3年生 伴 由紀子

メディカルカフェの前には今中先生による中国医学についての講演を聞きました。生薬については授業で学んだことがありましたが、中国医学については学んだことがなくとても興味深かったです。西洋医学を中心に学んでいる私にとって、中国医学の考え方は正直突飛に感じられたのですが、メディカルカフェで患者さんとお話していると「今まで不思議に思っていたことが解決できた」「すんなりと頭に入ってきた」という声が聞かれました。やはり、医療従事者と患者さんでは受け取り方が違っているのだなと実感しました。西洋医学が正しいとか、中国医学が正しいとか難しいことは私にはわかりません。患者さんにとっても、どちらが正しいということは問題なのではないと思います。

次ページへつづく

自分が理解しやすく納得できて治療に積極的に参加できるのならば、どちらも正しいし、いいとこどりをしてもいいと思います。医療従事者になる者として、西洋医学だけでなく様々な考え方を学び患者さんに教えていくことも、患者さんの積極的な治療参加につながるのではないかと感じました。

メディカルカフェでは、はじめてファシリテーターをさせていただきました。今までのように、患者さんの話を聞いて自分が考えたり感じたりすればいいわけではないので、大変でしたが「参加されている方の気持ちや考えをいかにうまく引き出せるのか」を考えてのカフェはとてもいい経験になりました。

今回メディカルカフェでお話をしていて特に考えたのは「患者と家族」についてです。多くの患者さんは、家族をはじめとして周りの人に迷惑をかけないようにしたいと考えられるものだと思います。しかし、多くの家族の方は、自分になにができるのだろう、何もしてあげられないと悩むものだと思います。この話題になったとき、ある患者さんが「周りにいっぱい迷惑かければいいのかよ。だってわたしがんよ？だれも迷惑だなんて思わないわ」と笑顔で仰っていたのです。いい意味で開き直っていらっしゃる姿に、その通りだなと思いました。体が弱っているのに、周りに対して気を遣う必要なんてないと思います。いっぱい甘えて、いっぱい迷惑をかけた方がいいと思います。そうすることが家族の「何もしてあげられない」と悩むことへの助けにもなるのではないかとも思いました。これから薬剤師として働くうえで、こういったことに悩む患者さんや家族の方に接する機会は少なくないと思うので、今回聞いたことや感じたこと、考えたことを少しでも役立てるようにこれからも学んでいきたいと思っています。

メディカルカフェでの気持ちの変化

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

4年生 久野 聡子

メディカルカフェは今回が初めての参加でした。事前に樋野先生の本を読ませていただいたり、すでに何回かカフェに参加したことのある皆さんからカフェの雰囲気などのお話は伺っていたので、カフェに来られるがん患者さんが世間一般のイメージと違ってとても明るく逆に元気をもらえる存在なのだ、と頭に情報としては入っていました。ですががん患者さんと長時間お話ししたことがない私は、まだまだ心のどこかで暗いイメージを持ってしまっていたので、自分の気持ちと周りの情報とのギャップがある中で参加しました。

率直に言うと、気持ちが180度変化し、ギャップが無くなりました。どのテーブルでも常に和気あいあいとした雰囲気で終始笑い声が絶えず、本当に驚きました。私は患者さんのお話をうなずきながら聴くことで精いっぱいでした。ですがそんな私にも目を見てお話ししてくださり、目の前の自分の存在を受け入れてくださったような気がしてとても嬉しかったです。皆で1つの時間を共有するとこんなにも心が温かくなるのだと思いました。私のグループのある患者さんは、メディカルカフェに限らず他の患者会にも積極的に参加していらっしゃる方で、自ら足を延ばし、患者さん同士のコミュニティの輪を広げていて、すごいなと思いました。私は普段から新しいコミュニティに飛び込むのにとっても勇気がいり、なかなか初めの一步を踏み出せないことが多いです。

次ページへつづく

ですがその患者さんは、「飛び込んでみて自分に合わなかったら次からは行くのをやめればいいだけの話。絶対自分に無理はしない。」とおっしゃっていて、すごく心が軽くなりました。これから先生きていく上で新しい環境に飛び込んだり挑戦することは必要不可欠であるし、避けていてはもったいない。患者さんの言葉を胸に、何事に対しても少しずつでいいから初めの一步を踏み出したいと思いました。このことに気づかせていただいた出逢いとご縁に感謝したいです。

カフェの前に開かれた講演会では、中醫師である今中先生のお話をお聞きすることができました。がんは陰と陽タイプに分かれ、どちらのタイプかによって治療法が大きく異なることを知りました。普段あまり中医学に親しみがなく、今中先生は例えを使って説明してくださったのでとてもわかりやすかったです。体内の色々な臓器や組織は、1本の経路で繋がっているため例えば舌診することで胃の調子などがわかるなど、気軽に自分の体の事を知ることができるのでとても良いと思いました。ただ症状を診て薬で治すだけでなく食事療法や温泉療法、漢方薬など中医学の観点からもアプローチすることで治療の幅が広がると感じました。

メディカルカフェを終えて

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ
3年生 本山 莉紗

今回のメディカルカフェでは中国医学についての講義を受けた。

中国医学では、経絡というものも関係している。経絡とは代謝物の通り道のことである。例えば、膝が痛いといっても膝そのものに原因がある場合もあれば胃の経絡による場合もある。だから原因の元となっているものを知り、そこを治すことが重要なのだ。また、がんは陽と陰に分かれているようだ。この種類の違いを鍋に例えた説明がわかりやすかった。陽は若い人に多い状態で、熱を多く帯びており、例えると鍋が沸騰してしまうような状態である。そして鍋から吹き出ってしまった状態のものががんであると例えられていた。治療法としては鍋の火を弱くすることで熱が下がる、つまり熱を下げる治療をすればがんの進行が弱まるという考え方である。一方、陰の方は熱が少なく、例えると鍋の中に水分がすりきれまで入っている状態である。この場合は治療法として、水分を減らすことが必要となる。患者はこのどちらのタイプであるかを知ることが大切である。

講義後のカフェでは同じグループに鍼灸師の方がいた。この方の治療法はてい鍼という刺さない鍼を使ったものである。そのてい鍼という道具には銅や銀、金、ステンレスなどの種類があり、症状によって使い分けているようだ。この治療方法も経絡が関係しており、例えば目の疲れが気になる場合は目のまわりのツボを、肩こりが気になる場合は頭を刺激する。実際に目のツボの体験をしてみると痛みはなく視界が明るくなる感覚になった。この治療法は服の上からでもできるし、感染性がなく、即効性があり、鍼を刺せない部位にも適応することができるという利点がある。この治療を受けたことでもともとがんのステージ2だったのがステージ1に変化したという方もいると教えていただいた。外科治療や食事療法、音楽療法以外にもこんな治療方法があることを初めて知った。

今回のメディカルカフェでは今までとはガラッと変わって様々な発見が多い一日だった。中国医学という考え方は今まで知らなかったし、新たな治療方法として鍼灸という治療方法があるということも知ることができた。

次ページへつづく

私たちはどうしても西洋医学に目を向けがちであり、それが悪いというわけではないが、中国医学にも視野を向けて考えることも一つの手なのではないかと今回のメディカルカフェで感じた。またこのカフェは今まで知らなかった情報をお互いに共有することができるし、出会いの場でもある。大学で学んでいるだけでは知りえなかったことを得ることができるので、もっとこのカフェが広がってほしいと思う。また薬学の知識がある人間としてカフェでもっとさまざまなアドバイスや適切な情報を提供できるようにこれからも勉学に励み、このカフェで得られた知識を応用して実習などで生かしていきたいと思う。

メディカルカフェに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

4年生 増田 悠香

今回のメディカルカフェでは、中国医学の観点からがんについて知ることができました。

もし自分ががんに罹ったら、ショックを受け悲しみに打ちひしがれると思います。それは「がん=死につながる病気」であると思っているからです。しかし、「がんで人は死なない。がんは怖い病気ではない」と今中先生はおっしゃいました。最初は、「そうは言っても、がんは死につながる要因じゃないか」と頑なに、がんに対する強い偏見を取り除くことはできませんでした。

今中先生の講演では、陰と陽にわけて、つまりヒトのタイプによって、がんにも二種類存在することをわかりやすい例を用いて解説していただきました。まずそこで、自分自身のがんに対する知識が浅かったことを知りました。まさか、治しやすいがんと治しにくいがんが存在するとは思いませんでした。がんは、発生する器官にもよりますが、発生してしまえば一生付き合っていくことになる病気だと思っていました。また、口内炎や舌の状態を見ると自分が陰のタイプか陽のタイプが分かる、という話を聞いて、自分に置き換えて考えたときに当てはまるが多かったため、ただただ驚きました。今まで習った人体の仕組みからは考えることのできない話で、西洋医学と中国医学でこんなにも考え方が違うのか、ということ以上に、自分が今まですることのできなかつた見方をすることができて驚きました。ただ、やはり今までしてこなかつた考え方を、聞いたその場ですぐ吸収して理解することは難しかったです。

その後メディカルカフェが始まると、私の班にいらっしゃった鍼灸師さんから、今回の講演に沿ったお話をお聞きすることができました。それだけでなく、実際お持ちになっていた針で、目の疲れが取れるような針治療や肩こりが和らぐ針治療をしていただくことができました。よくテレビで見かける細い針を刺していくのではなく、太く、先に行くにつれて細くなっていくような針を、直接皮膚の上に押しあてたり服の上から押しあてたりするようなものでした。実際体験してみると、にわかには信じがたいのですが、効果を感じることができました。それにより、針治療に対する、痛そう、気休めでしかないだろう、という偏見はなくなりました。

新しい発見をたくさんして、知識も増え、驚きの連続であったことは確かなのですが、それをこの感想文に書き記そうとすると、上手く表現することができませんでした。それは、私の語彙力が低いからなのか、はたまた驚きが強すぎた故に理解が追い付いていないからなのかは分かりません。ただ、今回のメディカルカフェを通して、自分の持っている知識は偏っており浅いこと、また視野を広げているんな分野に触れることで違った見方ができることを知りました。学校で習っていることが全てではないし、臨床現場に行けば全てわかるというわけではないのだな、と思いました。もちろん二つとも大事なことでありますが、メディカルカフェやその他のイベントを通じて、様々な人たちと交流していくこともとても大事なことだな、と感じました。

この感じたこと、思ったことは忘れずに、これからも学んでいきたいと思います。

かけがえのない場

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

5年生 田中 葉月

今回のがん哲学塾は、“お互いが苦痛にならない存在となる”の一節を用いて開催されました。この一節の中には、メディカルカフェの役割について書かれている部分があり、ちょうど私たち自身もゼミ生として、メディカルカフェに参加させて頂くようになってから約1年が経ったので、改めてメディカルカフェの存在を感じるきっかけとなりました。

私自身が、初めてメディカルカフェに出会ったのは、3年生の祖母のがんを知ったときによくわからないまま参加した時でした。その時に誰にも話せなかった祖母のことを聞いて頂き、不思議な気持ちになったことを覚えています。そして4年生のゼミ選択のときに、メディカルカフェに関わることができるこのゼミへの配属を迷うことなく志望していました。

ゼミ生として参加させて頂くようになってからは、思いもしなかった自分の苦手なことに向き合う場でもあるように感じています。自分の未熟さがむき出しになり、苦手なことに向き合うことは容易なことではありませんが、これまで向き合わずに過ごしてきたことを気づかせて頂いたことに、今は感謝しています。私にとってメディカルカフェは、2年前に不思議な気持ちになった場から、決してそれだけではないかけがえのない場になっているような気がします。

本日の哲学塾やメディカルカフェもそのような場であったように感じます。

哲学塾では、自己肯定感の話題になりましたが、あるゼミ生が、「話すことが得意な人」もいれば、「手先が器用な人」もいる。「しきるのが上手な人」もいれば「絵を書くのが上手な人」もいる…」ということを行ったことがとても心に残っています。この言葉は、実習を終え、できないことばかりに目が行っていた私にとって響く言葉でした。得意なことで少しでも貢献できればいいんだと思うと、心に余裕のスペースができ、同時にやっぱり苦手なことも、もう少し努力しようという気持ちがでてきました。

祖母が出会わせてくれたこの場で卒業までに少しでも成長できるといいなと思います。

「メディカルカフェに参加してから一年経って」

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

5年生 森夕理子

私が初めてメディカルカフェに参加してからちょうど一年が経ちました。一年前のメディカルカフェは私にとって研究室に配属されて初めての活動だったので、とても緊張していたと記憶しています。私の周りにがんの方はいないため、直接がん患者さんとお話したことがなく、知識も学校やメディアからの情報程度しか知りませんでした。どうやって患者さんに接すればいいのか、何をお話すればいいのか、頭の中で考えていましたが色々考えていましたが、結局行動に移せず、ずっと黙ったままひたすら患者さんのお話を聞く事しかできませんでした。自分がとても情けなく感じましたが、樋野先生の本や先生方のお言葉で、何も話さなくてもいい、お話を聞いて患者さんの気持ちに寄り添うことで患者さんはそれだけで気持ちが軽くなるんだよと教えて頂きました。それから自分が何をすべきかを考えるよりも、相手が何を考え、何を求めているのかなど、相手の気持ちを汲み取ることを意識するようにしました。メディカルカフェに来られる方はいろんな方がおられ、様々な思いや考えを持っておられます。そのため何をしたら正解という概念はなく、来てくださった方々がすこしでもほっこりした気持ちになってくれれば、私もお話を聞いてよかったと感じられます。

次ページへつづく

メディカルカフェの回数を重ねるごとに患者さんの表情をうかがって、どうやって話を振ればいいのかや言葉のかけ方なども考える余裕ができました。最近では自分がファシリテーターをするようになり、班のなかでみんながお話できるように話をまわせるようにまできました。こういった経験を通して、「がん」に対しての印象も大きく変わり、またがん患者さんのお話から自分の生き方を見直すきっかけとなりました。いままで目の前のやるべきことをただひたすらこなすだけの生活から、もっと先のことを見据えて、自分の考えをフィードバックする時間を設けるようにしました。それによって自分の反省点やこれからの課題を頭の中で整理することができ、人生という道を一步一步大切に歩んでいるように感じることができました。忙しい時は自分のことで精いっぱいでも周りのことが見られなくなりがちですが、これを実行することで気持ちに余裕ができ、いろんな視点で物事を考えられるようになると思います。私はメディカルカフェに参加する前と後ではその点で大きく成長したと感じました。

メディカルカフェに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ
2年生 鹿児島 成美

今回、アクティブ・ラボとして最後で三回目のメディカルカフェに参加させていただきました。参加した一回一回、毎回違う発見や学びがありました。私はスタッフ側の人間で参加しているのにもかかわらず、いつも元気をもらって帰っていました。次はどんなお話が聴けるのだろうと楽しみになるほどです。はじめはがん患者さんがたくさんいらっしゃるということで、私なんか参加して失礼なことをしてしまわないか、何を話していいのか、役に立てるのかなど不安しかなかったのですが、全然そのような心配はなく、明るくて強い方ばかりで周りの人も笑顔にさせてくれるような素敵なお方にたくさん出会うことができました。がん患者さんに対する勝手な自分のイメージをガラッと変えてくれました。そして、病気を持っている方は持っていない人と比べて毎日を大切にされている印象を受けました。ある方の、がんになったことで好きなことを自由にさせてもらっているという言葉は印象に残っています。しかし、薬による副作用の痛みや様々な悩みももちろん抱えていました。自分自身で先生の講演会などに出向き、がんについて勉強されている姿をたくさん見ました。私は本当にまだまだ何も知らず、無力であることを先生方のお話を聴いていると実感しました。学校では単位を取ることに必死でこのままで薬剤師などになれるのかなとふと考えることがよくあります。徐々に難しくなっていく勉強に不安になります。しかし、私に元気をくれた方たちのことを思い出すと私も誰かの力になれる存在になりたいと思えて、日々の支えになっています。私も将来、薬剤師となって少しでも患者さんの心の支えになり、恩返ししたいと強く思います。まだまだ知らないことがたくさんあるので積極的に様々なことを学んでいきたいと思えます。メディカルカフェは自分自身を見つめなおすことができたし、患者さんと直接話すという貴重な機会になりました。そして、「人とのつながり」や「出会い」は当たり前前の日常でも一番大切なことではないかと思いました。このカフェに参加しなければ気づくことはなかなかできなかったと思います。本当に私にとってプラスになることしかなく、二回生という段階で参加できたことに感謝したいです。この経験を糧に患者さんの力になれる薬剤師になれるよう頑張っていきたいです。

顧問：樋野興夫 教頭：沼田千賀子 副塾長：横山郁子

塾生： 田中葉月、堀部里帆、森夕理子、久野聡子、増田悠香

アクティブラボ：渡邊理乃、伴由紀子、本山莉紗、中山愛理、鹿児島成美、森山由理